文明観光学は世直しの学び。

～これからの世界で大学が果たす役割とは～

知事対談

平成31年4月、静岡文化芸術大学（浜松市）に新しい教育コース「文明観光学」が開設される。
次代の観光産業を担う人材育成はもちろん、
グローバルな視点から人類の抱える難題も解決しようとする同大学の「文明観光学」とは何か。
その本質と、これからの日本、静岡にとっての意義について、
川勝平太・静岡県知事と横山俊夫・静岡文化芸術大学学長が語り合った。

文明化と西欧化は根本的に異なる考え方

横山氏　静岡文化芸術大学（以下文芸大）に「文明観光学」という新しい教育コースを設けることになりました。これは縁と申しますか、知事と私が学んだオックスフォード大学も文明につながる要素が多く、たくさんの人が滞在して、対話して新しい輝きが生まれる所ですね。

知事　オックスフォードは大学町ですが、町全体が観光地ですね。文芸大で文明観光学コースを立ち上げられるというのは、楽しみです。文明と観光をセットにするのは、どのような考えからですか。

横山氏　世界中にある「文明」に類する言葉、つまり、理想社会を語る言葉に共通するのは「他者への思いやり」です。ただ、その「他者」とは、人間だけなのか、それとも花や蝶、山や川や海も含むのか、という点で異なります。例えば、「国の光を見る」というのが中国の古典である『易』に出てくる「観光」です。その「光」は、徳の高い人たちが集まって醸し出す「輝き」のようなもの。「徳の高さ」とは「天地とともに文（あや）や、美しい織物）をなしうる」ということです。ところで、文明とは天地人が「文（あや）なし明らかなこと」です。つまり、「文明なくして観光なし、観光なくして文明くすむ」です。漢字文化圏で言う文明や観光は、言葉の歴史が古く、豊かな意味合いがあり、単純に西欧の「ｃｉｖｉｌｉｚａｔｉｏｎ」の訳語として考えるとちょっと貧しくなりますね。

知事　文化と文明を、どのように区別されていますか。

横山氏　文明というのは、まとまりのある地域全体を語る言葉です。例えば静岡というまとまりの世界の調和だと思います。

知事　近代西欧人が目的にした理想はギリシャ・ローマの古典古代でした。古代に追いつき追いこすという姿勢が「進歩」の観念を生みました。西欧人が古代を抜いたと確信したのは18世紀末頃ですが、その頃に中国から「中華」の概念が西欧に伝わります。それが「シビリゼーション」という言葉に転じました。中国の「華夷」思想が転じて、19世紀の西欧は世界で最も進歩した「シビリゼーション」だという自己中心主義が生まれて、そうした内容の本が出ます。それを読んだ福沢諭吉は「シビリゼーション」を「文明」と訳し、西欧文明と比べて日本は「半開」で、「西欧文明を目指せ」と論じました。しかし、横山さんは「文明」の語源に立ち返り、文明のもつ本来の意味は「あやなして光り輝くこと」「徳や教養のあること」と説かれていますね。

横山氏　東アジアの古典に親しむ人なら、徳が盛んな国を褒めます。今、求められている徳とは、この世界の多くの課題に向き合い、良い解決法を見つけていく力を持つことでしょう。今や、ひとつの宗教に万人が従うようなことは考えられません。しかし、実生活では万人が緊密につながらざるを得ない。そういう時に、どのように文をなして、お互いに輝き、将来にツケを回さず、明るく生きていけるかということを考えなければいけません。そのためにこそ学問や大学があるということがより強く意識されるなら、学生にも教師にもチャージがかかるでしょう。そして、少しでも輝きが増せば、それを見に来られる人も増え、文芸大は国際文明観光の名所になります。

静岡文化芸術大学学長　横山俊夫（よこやま としお）氏

静岡県知事　川勝平太（かわかつ へいた）

知事　お話を聞いて、西郷南洲（隆盛）の『南洲遺訓』を思い出しました。南洲は「文明とは道の普く行はるゝを賛称せる言」と述べ、「未開」の国に対して「残忍の事を致し己れを利する」西洋を「野蛮」だと言っています。宮殿を飾ったり、権勢を誇ったりするのは文明ではない、と言い放っています。

　幕末に官軍に降伏した庄内藩の藩主や家老が切腹を覚悟したところ、西郷は「良く戦った」と寛大に処遇しました。その度量に感激した藩主は、鹿児島の西郷のもとに家来を派遣し、教えを請うように命じました。家来たちが感動しながら聞いた西郷の話の記録が『南洲遺訓』です。福沢や明治指導者が目指した西洋文明に、西郷は手厳しい。

横山氏　福沢の文明論は当時の西欧の進歩主義者たちの考えに近いですね。東アジア古典由来の考えとは異なります。

真淵と家康から静岡の文明観を読む

知事　横山さんは、若いころに遠州の生んだ国学者・賀茂真淵を研究されました。真淵は『国意

横山氏　現代中国で、日常に使われる文明、ウェンミンというのは、行儀良い状態といった意味です。しかし、東アジアで古代から今に至るまでの様々な使われ方の中で、一貫して変わらない核となる意味があります。それは人間とそれ以外り。文化は、「文（あや）に変化する」こと。何であれ、粗野であったものが洗練されれば文化です。でも、全体としてどこかに無理を押し付けていないか、次世代も続くかどうか、しかも明るく、と考えるのが文明を問うことです。文化は、戦後のアメリカ社会学の影響もあって単にｗａｙ ｏｆ ｌｉｆｅ、生活様式のように思われがちですが、漢字は「文に化す」としている事を大切にしたいですね。

知事　現在使われている「文化」は欧米の社会科学で使うカルチャーの訳語です。文化の定義は欧米では「ｗａｙ ｏｆ ｌｉｆｅ」です。訳せば「生活様式」。現代中国の「文化大革命」の「文化」は、毛語録で人民を教化することでした。

横山氏　言葉は歴史の中で変わっていきます。現代中国で、日常に使われる文明、ウェンミンというのは、行儀良い状態といった意味です。しかし、東アジアで古代から今に至るまでの様々な使われ方の中で、一貫して変わらない核となる意味があります。それは人間とそれ以外

文明観光学は世直しの学び。

～これからの世界で大学が果たす役割とは～

考』の中で「人は虫と変わらない」と書いています。草花、鳥獣、虫魚などと人は対等だという意味です。ところが、隣国では人間が偉ぶって、動植物を見下していると評しています。遠州の地に生きた真淵が日本にふさわしい政（まつりごと）を考えていたことと、今回、横山さんが文明観光学を立ち上げることは無縁ではなさそうですね。

横山氏　鳥や獣は人間の今の生き方を見て笑っている。あんな風にならないようにと言い合っていると真淵は述べます。同じようにこの地で独自の世界観を練り上げた徳川家康の戦後の国づくり、これは強烈な平和維持策ですが、圧倒的な武力を背景に、しかしそれを振り回さずに時勢を整えます。真淵が18世紀半ばに語っていることを重ねますと、あるいは、このあたりの土地が生み出す発想だったのかもしれません。人間だけにこだわらず、人間社会を取り巻く全体の中で、鳥にも笑われないようにと言っているのは、古典的な「文明」観に近い。

知事　徳川家康の戦場での旗印は「厭理穢土・欣求浄土」でした。戦乱で穢れた世の中をいとい、浄土を希求した。浄土では衆生はことごとく救われます。「衆生」とは、人間だけでなく、虫も鳥も獣も魚も花も、生きとし生けるものすべて含んでいます。草木国土悉皆成仏です。衆生は仏性を持つというのが「厭理穢土・欣求浄土」の背景にある世界観です。その世界観を家康は浜松や駿河で身に付けたのでしょう。家康は豊臣氏を滅ぼすと「元和」を元号にさせます。「和を元める」という平和づくり宣言です。その方針を明確にして家康は世を去ります。その精神は真淵にも通じているように見えます。

静岡文化芸術大学学長 横山俊夫氏

1947年生まれ。京都府出身。京都大学大学院法学研究科修士課程修了。オックスフォード大学哲学博士。テュービンゲン大学客員教授、京都大学人文科学研究所教授、同大学院地球環境学堂教授、三才学林長、京都大学副学長、滋賀大学理事などを経て、2016年から現職。

文明観光学は世直しの学び

横山氏　文明観光学コースではまず、古今東西の、文明に類するいろいろな理念の一覧表を作ろうと考えています。世界各地に文明的な世を目指した事蹟がありますから。文芸大が目指しているのは、一つの物差しで良し悪しを論じることではありません。期待しているのは「今、それぞれの考えはこの辺の位置にある」と自他の居場所をわきまえることで生まれる対話です。そのようなきっかけになる、年表と地図を合わせた三次元マップを作りたい。ある地域、ある時の「文明」が絶対的に正しく、残りは序列化して並べるようなタイプの学問は世を暗くする一方です。文化や文明は、単純な次元で比較できません。ですから、まず大きなマップを作ろうと。その上に、静岡での新たな観光企画や実務の学習が展開するのです。新教員として、紀元前３０００年来の西アジア諸文明の宗教研究者、現代ギリシャ政府の観光行政に長く関わった考古学者を招き、文化政策学部を中心に多くの教員が協働する体勢を整えています。

知事　文化政策学部には文明観光学コースを設置し、デザイン学部には匠領域を設置されるとのことですね。

横山氏　３年前から、デザイン学部を1学科制にして、中に5つの領域をこしらえ、学生は2年までどの領域へも行き来できるようにしております。そこに新しく「匠領域」も加えます。

知事　私が学長の頃の文芸大のデザイン学部は、プロダクト、メディア、空間の3学科構成で、どちらかと言えば洋風です。浜松の自動車メーカー・スズキの社風は、なるべく軽く・薄く・安くという「軽・薄・短・小」のように見えますが、実際の標語は「軽・薄・短・小・美」で、最後に「美」がついています。軽薄短小だけでは不十分で、「美」が入っていることが重要です。

横山氏　それは、厳しい条件のもとに最良の形を仕上げるという匠の工芸の伝統です。

知事　工芸の美は人の心を打ちます。高い技術で有用な製品を作るだけでなく、匠の技のように心に訴える芸術性がいります。いいデザインは「用と美」「用の美」ですね。鈴木修さん（スズキ株式会社代表取締役会長）の『中小企業のおやじ』という本を読むと、「美」の重要性を心得ておられることがわかります。

横山氏　私は浜松に着任してまだ2年ですが、見ていると、静岡県にはそういう美意識が生きている場面が多いですね。

知事　文化の花は芸術です。芸術はまさに「あやなして光り輝く」ものです。輝く光に惹きつけられて人が来れば観光になります。そのような文明社会を目指す、あるいは本来の文明を取り戻すことを自覚的に実践すれば、それは文明観光になりますね。

横山氏　結局、文明観光学というのは、始まりは小規模であっても、世直しの学びだと思っています。限られた領域で順位を競い合い無制限に突っ走っても、「文なし明らか」とはなりません。文なす暇があるなら、それは脱落を意味する、などと迫られてきたのが20世紀です。しかし、これからの大学は、地域に縁のある人々が集まり、何かを生み出す場としての性格を強めます。そのためには、いろいろな分野から集まり、観光し、新しい力を得れば分かち合っていくことが必要です。それができれば文芸大も静岡も面白くなります。

知事　今年は１８６８年から数えて明治１５０年目。これまでの１５０年は何だったのか。欧米流の自称「文明」が幅をきかせた時代です。弱肉強食で弱いものが蹴散らされた時代でもありました。日本はその優等生になりましたが、本当にこれまでどおりで良いのか、もう一度考え直すべきときがきています。その意味で、「文明」の原義を踏まえた文明観光学は世直しにつながりますね。

横山氏　このままでは人類社会は危ういというのは、若い人たちの方が敏感に感じています。就職先の選び方にしても、自分の人生をどう考えているかということについても、一昔前とは違う気配があります。それぞれの人が「文のなし方を考えている」という印象を受けます。

知事　なるほど。文明観光学への期待は、ますます高まりますね。

静岡県知事 川勝 平太

1948年生まれ。早稲田大、同大学院を経て英オックスフォード大で博士号取得。早大教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長などを経て2009年より現職。現在3期目。